

MiYAGi

# まちづくりと 地域支え合い



塩竈市で第1層協議体が発足(詳しくは2頁へ)

2 MIYAGIの今 19 塩竈市  
第2層から立ち上げ 地域の活動を面で捉えるために

3 MIYAGIの今 20 美里町  
地区ごとの情報を把握し、まち全体の支え合いへ

4-5 先進の地から〈10〉大分県中津市  
生活支援コーディネーターが学ぶ  
「沖代すずめ」の実践

6-7 インタビュー  
地域づくりは「なせばなる」 吉田日出子さん(地域ボランティア沖代すずめ 代表)  
住民活動の「多機能化」を 吉田瑞穂さん(中津市社会福祉協議会 地域福祉課長)

8 2017年度 第1回宮城県地域支え合い・  
生活支援推進連絡会議 & 情報交換会を開催!

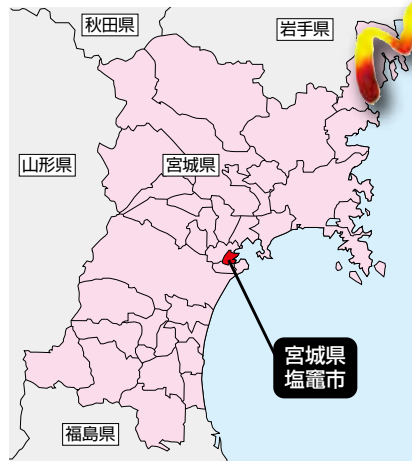
宮城県内外の  
生活支援コーディネーターおよび協議体の  
取り組みを発信しながら、  
住民や専門職・関係機関の意識を高め、  
最後まで住み慣れた地域で暮らし続ける  
社会づくりを目指します。

vol.11  
2017.7



# の今 19

## 塩竈市



# 第2層から立ち上げ 地域の活動を面で捉えるために

「ネーターの働きに期待しています」と話します。

市内には、町内会を基盤とする体操教室が60か所以上あり、住民が自主運営しています。第2層コーディネーターは、これらの地域の集まりに顔を出して、支え合いのたいせつさを説く活動から始めています。一方、4島からなる浦戸諸島は、昨年度はUR都市機構の職員がコーディネーターを務めました。今年度は配置も含めて検討中です。

第2層協議体は、それぞれ町内会役員や民生・児童委員、健康推進員、サロン実践者、介護事業者、病院などの5〜6人で構成され、2か月に1回開催。各協議体は、実際の地域活動を出し合ったり、サロンを見学して協議体が目指すまちのイメージを共有したり、85歳になった自分を思い浮かべて、どんな資源があれば地域で暮らせるかを話し合うなど、進め方はさまざまです。自分の地域以外の実情を知らないメンバーが多いため、今年第2層協議体合同の会を設け、お互いの地域特性や取り組みについて意見交換をしたいと市は考えています。

7月6日には、4回の検討会を経て、第1層協議体が発足しました。市内5地区の町内会連絡組織や民生・児童委員協議会、市老人クラブ連合会、ボランティア団体、市社会福祉協議会、市シルバー

人材センター、ケアマネジャーネットワークなど13人で構成。佐藤昭市長から委嘱状が交付されたのち、委員長に就いた仙台北百合女子大学准教授の志水田鶴子さんの進行のもと、宮城県

地域支え合い・生活支援推進連絡会議運営委員長の太坂純さんが、「地域づくりとは」と題した講話を行い、この事業への理解を深めました。その後の意見交換では、各地区の特性や地域づくりで感じていること、町内会と民生・児童委員の連携のちかなどが話題にのぼり、第2層コーディネーターも出席して意見を共有しました。

さらに市では、ケアマネジャーや介護保険サービス事業者対象の勉強会を継続して実施（16年は6回）。「地域の支え合い、つながりを見据えたケアマネジメントが必要」と考え、住民と専門職双方に働きかけていく方針です。

**知**

**DATA**

**塩竈市**

人口 54,926人  
(2017年6月末時点)

高齢化率 32.04%

新しい介護予防  
日常生活支援  
総合事業の実施 2016年4月

生活支援サービスの  
体制整備の実施 2015年4月



第1回協議体



市長より委員に委嘱状を交付



市長寿社会課と第1層協議体委員長の志水田鶴子さん(1列目)、第2層生活支援コーディネーター(2列目)の皆さん



# の今

20

美里町

| DATA                         |                          |
|------------------------------|--------------------------|
| 美里町                          |                          |
| 人口                           | 24,834人<br>(2017年4月1日現在) |
| 高齢化率                         | 32%                      |
| 新しい介護予防<br>日常生活支援<br>総合事業の実施 | 2017年4月                  |
| 生活支援サービスの<br>体制整備の実施         | 2015年4月                  |



美里町では、2013年から同町社会福祉協議会が町内の地区社協との情報交換会を行って、そのなかで見えてきたまちの様子を参考にしながら、生活支援体制の整備に取り組んでいます。情報交換会は、各地区で年2回ずつ開催し、地区社協の活動や住民の暮らしなどについて話

## 地区ごとの情報を把握し、まち全体の支え合いへ

し合います。その内容を知るために、町地域包括支援センターの職員も同席するようになったことから、町社協と同センターによる会議を3年前から設けるようになりました。会議は、地域住民の生活課題やそれを支える多職種の連携に関して意見を交えながら、体制整備事業を進める場にもなっています。同町地域包括支援センターの横山太一さんは、「町役場と町社協が互いの考えをすり合わせ、つながりを深めることが地域のためになる」と話します。

人材センター、介護保険サービス事業所、居宅介護支援事業所、町社協、町健康福祉課から8人の委員が参加しています。運営は、今年度より町社協が受託。今年6月に開いた際には、グループワークを行い、身の周りの集い場や見守りなどのはたらき・必要性を再確認しました。同会は今年度中にあと3回開く予定です。

町では、町地域包括支援センターが15年に第1層協議体の準備委員会を開き、16年に協議体「生活支援体制整備協議会」を立ち上げました。行政区長、民生・児童委員協議会、町商工会、町シルバー

今年5月には、町社協が、体制整備や支え合いについて、住民向けの研修を開催し180人が学びました。さらに、宮城県が実施している生活支援コーディネーター養成研修を、同町社協の全職員が受講しています。同町社協地域福祉課長の浅野恵美さんと地域福祉係長の永沼威雄さんは、「小さな社協は、みんな



町健康福祉課・地域包括支援センター、町社会福祉協議会地域福祉課の皆さん  
(左から2番目が生活支援コーディネーターの高橋ゆかりさん)



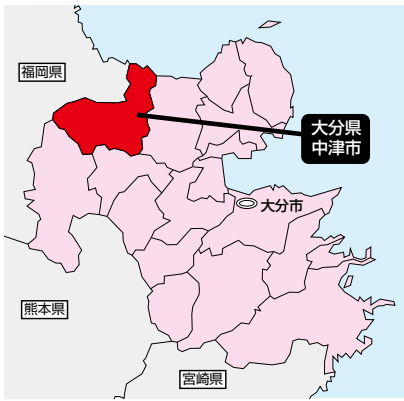
地区社会福祉協議会の情報交換会



町社協が主催した住民向けの研修

情報共有したり協力できることが強み。住民にも情報や状況をいねいに伝えていきたい」と話します。そして、町社協が体制整備事業を受託する際、浅野さんは、地域づくりへの理解に期待して、社会福祉士である横山さんを町側の担当者にももらえるよう相談し、認められました。町社協が受託する生活支援コーディネーターが孤立しない体制を整えたいうえで、今年6月に、第1層生活支援コーディネーターとして、社会福祉士の高橋ゆかりさんを新規採用しました。住民の集まりに顔を出し、お茶飲みに参加しながら情報を収集して、「初めは不安だったけれど、だんだんと地域が見えてきた」と話します。情報を集約して記録していき、今年度中に、生活支援体制整備事業の説明とあわせて、住民の支え合いの様子などを発信し始める予定です。

哲



# 生活支援 コーディネーターが学ぶ 「沖代すずめ」の実践

◎大分県中津市

**〔中津市〕**

大分県西北端に位置。2005年3月、中津市と下毛郡4町村(三光村、本耶馬溪町、耶馬溪町、山国町)が合併し現市となった。市域は都市化が進む旧市内と山間部が多い旧郡部とに大別される。中学校区は計10校区だが、市と市社会福祉協議会は地域福祉計画・活動計画で住民の日常生活範囲として15地区を設定、これを第2層圏域と位置づける。15地区は旧市内の小学校区11地区と、旧郡部の合併前町村域4地区で構成。

中津市の第1層生活支援コーディネーターが、週に1度は必ず足を運ぶ、住民主体のサロンと支え合い活動の拠点があります。「地域ボランティア沖代すずめ」が2000年に開所した「沖代寄り合い所すずめの家」(中央町)です。

沖代すずめとその関連団体が、沖代小学校区で展開する住民交流や高齢・障害者の孤立防止、健康づくり、生きがいづくり、給食ボランティア(高齢者向け弁当配食)、住民型有償サービス(家事援助など)といった活動と、これに関連した担い手の発掘・育成や支援組織のネットワーク化などの取り組みの卓越ぶりは、市社会福祉協議会が「実質的に第2層のコーディネーターと協議体の機能を持つ」(地域福祉課)と評するほど。生活支援体制

整備事業が始まる前から地域づくりのモデルとされ、市社協が中心となって他地区への波及を推進してきました。2015年4月、市が市社協に委託する形で同事業がスタートすると、沖代すずめとすずめの家は、コーディネーターの学びの場とも位置づけられました。

1層コーディネーターが、すずめの家でのサロン活動に従事するなどして、沖代すずめの地域づくりのノウハウを吸収。そのうえで、すずめの家をさらに多機能化し、充実させる方策を住民とともに考え、その実現に向けたさまざまな支援を行います。「本来は2層コーディネーターの仕事ですが、1層コーディネーターが2層の動き方を学び、理解しておくこともたいせつです」(市社協地域福祉課)。

**●段階的に2層を整備**

生活支援コーディネーターの配置は、15年4月にまず1層1人。市社協地域福祉課の正規職員です。2層は、17年4月から段階的に配置を進めます。原則として各2層圏域の住民を市社協の非常勤嘱託職員Ⅱ週3日勤務Ⅱとして採用します。

2層の圏域設定は、市町村合併前の旧市内の小学校区と、旧郡部の町村単位で計15地区。17年度はこのうち2地区に

| DATA                   |                     |
|------------------------|---------------------|
| <b>大分県中津市</b>          |                     |
| 【市全体】                  |                     |
| 人口                     | 8万4,601人(3万8,853世帯) |
| 高齢化率                   | 29.0%               |
| 【沖代校区】                 |                     |
| 人口                     | 8,235人(3,524世帯)     |
| 高齢化率                   | 19.6%               |
| ※ともに6月30日時点住基データに基づく   |                     |
| 新しい介護予防・日常生活支援総合事業への移行 | 2015年4月             |
| 生活支援体制整備事業の実施          | 2015年4月             |

コーディネーターを配置します。25年度までに全地区への配置を完了する計画です。

2層コーディネーターは、それぞれの担当地区にある、またはこれから開設する、すずめの家のような住民の集いの場を活動拠点とします。その拠点で、サロンや有償サービス、協議体などの立ち上げ支援を行います。いわば、沖代すずめ・すずめの家・コーディネーターのセットを各地区で展開するわけです。

住民主体のサロン、有償サービス、活動拠点の確保などは、従来から市社協が地域福祉の推進施策として取り組んできましたが、生活支援体制整備と連動するようになり、大きく進展する可能性が出てきました。

コーディネーターや市社協による、これまででの住民活動の立ち上げ支援の主な内容は、沖代すずめなどの先行事例についての情報提供や視察・研修の実施、老

人会・婦人会・子ども会といった住民組織の役員や民生・児童委員、一般住民有志、各種支援団体らを集めた話し合いの場の設置など。

●協議体は構成員入れ替えも

話し合いの場に関しては、市地域福祉計画・活動計画の策定が、市町村合併直後の05～06年度の第1次から、16年度の第3次まで、3度にわたって地区ごとの住民作業部会で行われました。この作業部会を母体とする「地域福祉ネットワーク協議会」（地区社協に相当）が、市内9地区で設置済みです。残りの地区でも、市と市社協のあと押しで設置が徐々に進むものと見られます。同協議会は2層協議体に近い機能を持つと考えられますが、協議体とはあくまでも別組織という位置づけ。

現在、市と市社協が想定している協議体の大きな特長として、「話し合いのテーマごとに構成員を柔軟に入れ替え可能」という点が挙げられます。これは、1、2層共通の要素となる見通しで、この柔軟性が同協議会などの既存組織との大きな違いになります。2層では、さらに「関心のある住民は誰でも参加可能な枠を設ける」（市社協地域福祉課）構想があります。

1層協議体は、今年9月の立ち上げ

を目標に準備が進められています。今年度のテーマは、「移動・外出支援」になる予定。構成員には、コーディネーターや市・市社協の担当者、地域包括支援センターの専門職、住民活動団体（有償サービスなど）や介護・福祉事業所の代表ら、それにはバス・タクシー事業者も入ります。市側からは、生活支援体制整備を担当する介護長寿課のほか、公共交通の関係課の参加も見込まれます。

移動・外出支援は、住民型有償サービスとの関連（たとえば、通院付き添い）もあります。同サービスの第一人者、沖代すずめとその関連団体の活動を協議体で参照すれば、住民同士のつながりを生かし、あるいはこれをつくることにも配慮した移動・外出支援のあり方を考えることができるでしょう。

●20年以上の実績を生かす

沖代すずめは、1993年に結成された住民ボランティア組織。代表の吉田日出子さん（78歳）が、公民館でのサロン活動を思い立ったことが結成のきっかけでした。夫の転勤で移り住んだ沖代校区の新興住宅地は住民のつながりが薄く、「高齢になったら孤立してしまう」（吉田さん）との危機感から、まずはつながりづくりを目指しました。

吉田さんは、サロン活動をとおして高

齢・障害者の抱える困りごとを敏感に感じ取り、それを個別の問題ではなく、地域全体の課題として受け止めました。ミニデイサービス、住民型有償サービス、男性向けの料理教室や集い場づくり、介護施設入居者のサロンへの受け入れ、介護施設などでの「出前の演芸などを次々に立ち上げていきました。

活動の幅を広げつつ、担い手確保にも注力。当初数人だった沖代すずめのメンバーは、現在50人を超えています。95年に始めた住民型有償サービス「沖代どんぐりサービス」は別組織ですが、代表は吉田さんが務めています。現在31人の「サービス提供スタッフ」の一部は沖代すずめのメンバーでもあり、サロンと有償サービスの両方に目が行き届く格好になっています。

2000年には、拠点を公民館から賃借の一軒家に移転。賃料はバザーを開くなどしてまかなっています。一軒家を拠点としたことで利用時間などの制限がなくなり、活動の自由度が増しました。また、参加者が自分たちの居場所として愛着を抱き、より主体的に関わるようになりました。

地域課題に気づいた一人の女性の始めたサロンが、住民、民生・児童委員、町内会、老人クラブなど、さまざまな個人・団体をつなぎ、小学校校区の地域づくりの輪

を生み出しました。市や市社協、地域包括支援センターなどの協力も得て、20年以上にわたる活動が続いています。その実績がいま、生活支援体制整備に生かされ、市全体へと波及しつつあります。

利

◆次ページに、沖代すずめの吉田日出子代表と市社協地域福祉課の吉田瑞穂課長のインタビュー。

生活支援コーディネーター養成研修「応用講座6」で当初7月下旬を予定していた中津市視察研修は「平成29年7月九州北部豪雨」の影響で実施延期となりました。改めて日程を調整し、参加者を募集します。



「沖代寄り合い所すずめの家」で週2回開かれる「すずめサロン」



## 地域づくりは「なせばなる」

吉田日出子さん(78歳・大分県中津市)

地域ボランティア「沖代すずめ」代表

住民型有償サービス「沖代どんぐりサービス」代表

——沖代すずめの結成前はどんなことをしていたか

視覚障害者関係のボランティア、NHK学園の社会福祉コースの受講、それにフォークダンスサークルや高齢者向け給食サービスの立ち上げと運営などをしていました。

——視覚障害者支援が地域福祉活動の出発点か

障害者の支援は、支援者と当事者の間だけでするのはなく、地域全体ですべきという思いが次第に強まり、地域活動に

軸足を移していったんです。

——沖代すずめ結成のいきさつは

1993年、沖代に公民館が完成し、そこに校区社協(＝地区社協)をつくりたかった。でも、市は当時、校区社協をつくらない方針だったので、実現しませんでした。それで、まず沖代すずめを結成して、公民館でのサロン活動『すずめサロン』を立ち上げました。サロンで地域の課題が見えて、高齢者ミニデイ『すずめのお宿』や、障害者ミニデイ『鈴の音』、男性料理教室『おじさまクッキング』、リハビリ教室、男の居場所『のじこサロン』などをつくっていったんです。

——活動が多彩になり新たな拠点が必要になった

そうですね。資金を得るためのバザーも公民館で開いて、二軒家(＝すずめの家)を借りる準備をしました。資金繰りはたいへん。でも、お金がないからこそ一生懸命になれる。最初から助成や補助があったら、きっといまのようにはならなかったと思います。私はいつも言うんですが、お金がなくても何とかしようという思いが、人と人をつなぐんです。つながりのなかで知恵と工夫が生まれるんです。

——活動に人を巻き込むのがうまい

私は人をその気にさせるのが好き、人がその気になっていくのを見るのが好きです。相手をよく観察して、どんなことができる

のか、何が得意なのかを見つけて、『この人にはこれをお願いしよう』と。私が何もかもに手を出すようなことは、しないようにしています。

——すずめの家のような集いの場づくりの原点は

私の故郷(中津市の隣の宇佐市安心院地区)には昔、各集落にお寺があつて、母親たちが毎月決まった日に集まっておしゃべりやお茶飲みを楽しんでました。自分が年を取ったとき、そんな場所があつてほしいという思いがありました。それが原点ですね。

——思いを形にするうえで特に役立ったことは

何か始めようとするとき、当時市社協にいた福祉活動専門員によく相談に行きました。彼は、先進事例の視察に連れて行ってくれたり、研修を受けさせてくれました。私が現場で考えるタイプだと見抜いて、どうサポートすれば力を発揮するかわかってきたのだと思います。給食サービスを始めたあと、『これからは住民型有償サービスが必要だ。いまの仲間ではできないか』と新しいアイデアを提示してくれたりもしました。

——好きな言葉を教えてください

『なせばなる。なさねばならぬ何ごとも』。やらないうちからできないなんて、言いたくありません。ボランティアはだめでもともど。とにかくやってみないと。

——いち早く生活支援コーディネーターを配置した

国から制度の概要が示されたとき、すぐに市に『うちでやりたい』と訴え、理解を得ました。生活支援体制整備は、住民活動の立ち上げや運営を支援する人員を、生活支援コーディネーターとして雇用できます。市協は、以前から住民活動の立ち上げ支援など、地域福祉の推進に取り組んできましたが、そのために新たな人員を雇用するのは予算的に困難でした。その部分を改善、強化できます。

——サロンや有償サービスなどの、新しい総合事業への移行は

沖代すずめなどの活動は、住民が草の根レベルからつくってきたものです。行政からの資金を当てにせず、知恵と工夫で乗り切る姿勢が優れた活動を生み出した面もあります。その流れを阻害しない配慮が必要です。安易な公費投入は、地域をかえって弱体化させる恐れもあり、慎重に行うべきです。ただ、住民が活動拠点を確保・維持するための家賃補助は市に要望し、今年度実現しました（※週1回以上のサロン活動、65歳以上が10人以上参加、10分以上の介護予防体操実施などを条件に、市が年間5万円を補助）。

——沖代すずめをどう評価し、生かしているか

代表の吉田日出子さんは、実質的に第2層の生活支援コーディネーターで、沖代すずめの活動は協議体の要素をすでに持つて

います。そのままでもいいのですが、あえて現在は1層の、将来は2層の生活支援コーディネーターが関わることで、沖代すずめとすずめの家はさらなる多機能化への展望を得られるでしょう。たとえば、すずめの家でサロン以外に何ができるか、より多くの人が集う仕掛けをどうつくるかをともに考え、話し合うわけです。一方、コーディネーターは、沖代すずめから地域づくりの実践を学ぶことができます。今後配置される各地区の2層コーディネーターにも、沖代すずめとすずめの家を体験させたい。それがコーディネーターとしての意識と能力を高め、ひいては市全体の地域福祉の向上につながっていくものと思います。

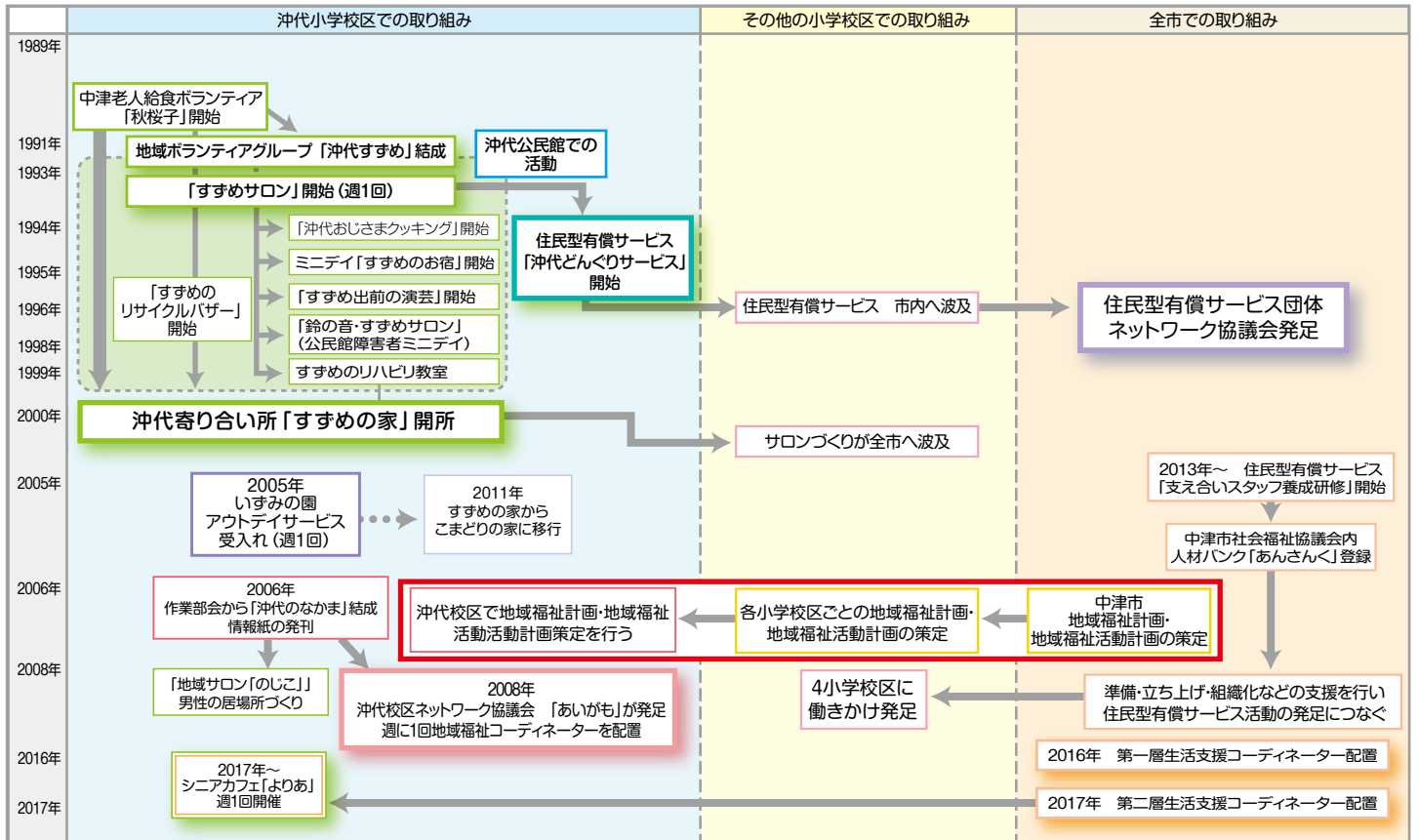


## 住民活動の「多機能化」を



吉田瑞穂さん(52歳・大分県中津市)  
社会福祉法人中津市社会福祉協議会地域福祉課長(社会福祉士)

中津市の住民活動の発展と広がり



# 2017年度 第1回宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議&情報交換会を開催!



本音も笑いも飛び交った情報交換会

県内の地域支え合いと生活支援の取り組みを推進する「宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議」(29団体で構成)は、今年度第1回目となる連絡会議及び情報交換会を、6月9日(金)にTKP ガーデンシティ仙台で開催しました。

連絡会議では、今年度の事業計画を確認したのち、同会議運営委員会委員長の大坂純さん(東北こども福祉専門学院副院長)が地域包括ケアを展開するための地域づくりの重要性について講演し、また移動支援の現状について、特定非営利活動法人移動サービスネットワークみやぎ理事長の坂井正義さんが話題提供しました。

(坂井正義さんのパワーポイント資料より抜粋)

## ニーズに応じて 市民が創ってきた さまざまな移動サービス



福祉有償運送  
道路運送法79条登録

高齢者や障がい者を対象に、車を使って原則対で送迎。

公共交通空白地  
有償運送  
道路運送法79条登録

交通が不便な地域の住民を対象に、車を使って送迎。

登録不要の活動  
道路運送法上の登録が  
不要な地域活動

自治会などの地縁組織や地域の有志が運行。

徒歩や  
公共交通を使った  
外出支援ボランティア

徒歩やバスや電車で、  
学校や買い物や通院の付き添いなど。

## 無償運送 (許可・登録不要の活動)とは

無償もしくは利用者の負担がある程度以下であれば、有償運送に該当しません。

- 利用者の負担がない場合(無償運送)
- 利用者からガソリン代程度の実費しか徴収していない場合
- 運送についての対価として、個別に利用者から徴収していない場合
- デイサービスでの送迎(自家輸送)

当日は、市町村担当者や生活支援コーディネーターなど98人が連絡会議を傍聴し、その後、15グループに分かれて情報交換会を行いました。特に、協議体と生活支援コーディネーターの役割や、庁内・関係機関との連携について話題が集中。運営委員からは次のような講評がありました。

○協議体の人選や進め方に悩んでいるところが多かったが、そのような場合は協議体づくりを急がずにコーディネーターの活動を優先する方法もある。

○第3層は身近な地域課題を考える役割があり、第1層は地域全体を大きな視野で考える役割であることを意識して。

○各協議体を有機的につなげていくことが、コーディネーターの役割の一つ。

○まちづくりを行ううえで、庁内の連携は欠かせない。

○行政と委託先はそれぞれ持ち味が違うので、互いの強みと弱みを理解し合いながら連携していくことが大事。

最後に、大坂委員長より「いろいろな悩みや苦労があるが、スキルアップのための研修やアドバイザー派遣、情報交換会など、県の事業を上手に活用してもらおうことが、この取り組みを発展させるコツ」との助言がありました。



住み慣れた地域で暮らし続けるためのお宝探し情報紙

Miyagi まちづくりと地域支え合い vol.11

バックナンバーがホームページで読めます [http://www.clc-japan.com/sasaesai\\_m/](http://www.clc-japan.com/sasaesai_m/)

発行日 2017年7月30日

編集 宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議

発行 特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター (CLC)

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1F

TEL: 022-727-8730 FAX: 022-727-8737

E-mail clc@clc-japan.com URL <http://www.clc-japan.com>